

法語カレンダー 二〇二二年（令和四年）

心に響く

山本 攝叡

ことば

心に響くことば——目次

表紙	念仏は、まことなき人生のまことを見せしむる光	5
一月	きょうもまた光り輝くみ仏のお顔おがみてうれしなつかし	11
二月	ふみはずしましたが気がつけばごも仏の道でございました	17
三月	われ称えわれ聞くなれど南無阿弥陀つれてゆくぞの親のよびごえ	23
四月	如来の本願は、風のように身に添い、地下水の如くに流れ続ける	29
五月	失ったものを数える人あり与えられたものに感謝する人あり	35
六月	「あたりまえだ」と言つて、まだ不足を言つて生きている	41
七月	この心も身も全部如来からのいただきますもの	47
八月	我が身を深く悲しむ心に仏法のことばが響く	53
九月	手を合わせ仏さまを拜むときわたしのツノを知らされる	59
十月	悲しみあるがゆえによるごびあり、煩惱あるがゆえに菩提あり	65
十一月	たとえ一人になろうとも仏はあなたと共にある	71
十二月	いただきますすと合掌するのは感動の表現である	77

表紙のことば

念ねんぶつ仏は
まことなき人生じんせいの
まことを
見みせしむる光ひかり

正親
含英

The *nenbutsu* is the light which shows us
the truth of our untrue lives.

今も奉公^{ほうこう}という勤め方があるのを、初めて知りました。

先日テレビのBS放送で、大阪船場^{せんば}のドキュメントがあり、船場にあるお茶道具屋さんに勤める青年が、映されていました。給料はなし。小遣い程度の報酬で、店の仕事は何でもこなします。草引きや庭掃除、トイレ掃除に接待、もろもろの仕事すべてをこなすのです。

むろん道具のことも学びます。展示会場で、道具のどの面を正面にするか、店員たちと議論している場面もありました。

一昔前は将棋の世界でも、弟子が住み込みで働いていました。しかし、直接将棋を教えてもらうことはありません。買い物から何から、用事は何でもこなします。棋力は自分で磨くのです。頭角をあらわして、プロへ進む道が見えてくればよいのですが、そうでない場合、黙って消えていくほかありません。

宮大工さんなどの世界も、十代のころはおそらく無給で技を習うのだと思います。法隆寺の宮大工として知られる西岡常一さんの本で読んだことがあります。お師匠さんを手伝いながら、その技を「盗む」のだそうです。かんなの研ぎ方や調整など、口で教

えてもらってもわかりません。お師匠さんの技を見て、体で覚え
ます。家を建てる時、材料の木材は、どこにどれを使ってもいい
のではないそうです。一本一本、育った条件が違います。日当た
り、方角、それらの癖を見抜き、一番ふさわしい場所を探すとい
います。これは言葉を超えた世界です。そして最も厳しい教育の
姿でもあります。

宗教の体験や経験は、読書や法話を聞いている時とは限りませ
ん。木材が一本一本異なるように、私たちは、誰に代わってもら
うこともできない人生を歩んでいます。大工さんが言葉では伝え
られない師匠の技を「盗む」ように、自分がお念仏の味を「盗む
(味わう)」ほかないでしょう。

船場に勤める青年の実家も、お茶の道具屋さんだそうです。目
利きを育てるためだけでなく、商人の姿勢を学ばせるため、父親
が奉公を勧めたといいます。報酬や給料めあてなら、そのような
勤め方はできないでしょう。

画面に映る青年は、とてもいい顔をしていました。